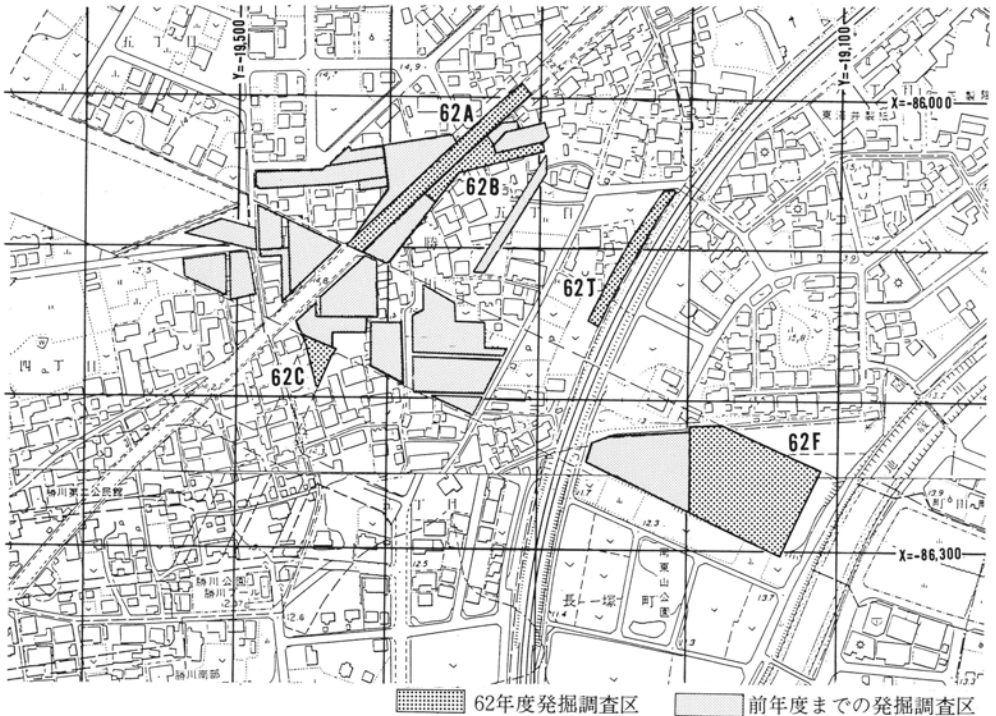


# 勝川遺跡

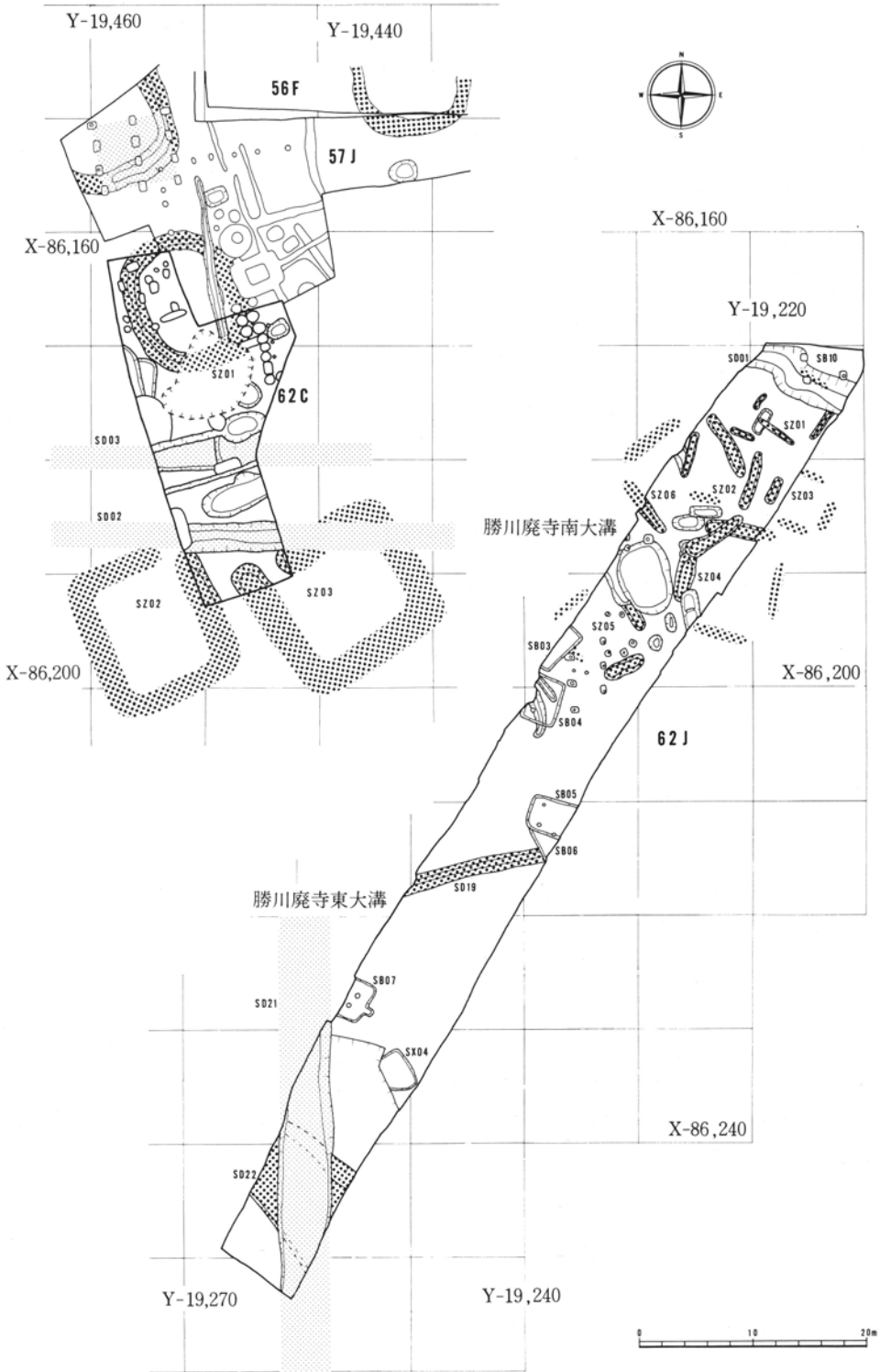
## 調査経過

勝川遺跡は、鳥居松面とよばれる洪積段丘の南端付近に立地する上屋敷地区と、その段丘下の沖積地に立地する苗田地区に分けられる。上屋敷地区は標高13mであり、弥生時代～江戸時代の四期に区分される複合遺跡である。苗田地区は標高9mであり、弥生時代～平安時代の複合遺跡である。Ⅰ期：弥生時代中期、Ⅱ期：弥生時代後期～古墳時代、Ⅲ期：奈良時代～平安時代（勝川廃寺）、Ⅳ期：江戸時代（下街道の勝川宿）とする。

本年度は、上屋敷地区・苗田地区を発掘調査した。62A・B区で方形周溝墓4基、掘立柱建物4棟、溝（下街道の側溝）を追加することができた。62C区で勝川廃寺南大溝・62J区で同東大溝を検出でき、寺域の範囲をより一層具体的にすることができた。62J区で勝川Ⅰ期の方形周溝墓・竪穴住居跡・溝を検出することができた。62F区は、56I区の東隣の調査区である。弥生時代中期の木製品と木器加工場跡の検出、奈良時代～平安時代の木製祭祀具（人形など）と墨書土器による「祓の祭祀場跡」を検出した。人形7点・墨書陶器約50点が川の岸边から出土し、数度の祭場跡と考えられる。（神谷友和）



第1図 勝川遺跡調査区位置図(1:5000)



第2図 62C、J区 主要遺構図(1:600)

上屋敷地区

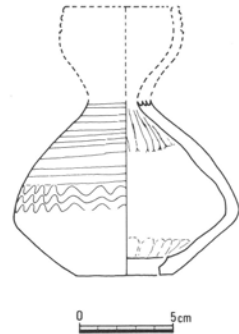
弥生～古墳時代

勝川Ⅰ期からみていくと、主な遺構に方形周溝墓9基・溝2条・竪穴住居跡1軒がある。方形周溝墓は62A・B区や62J区に集中し、墓域の拡がりを示す資料である。62B区のSZ02は1辺15mと勝川遺跡では最大規模を測り、その遺構の南半分は調査区外となっている。東溝は巾1.2m・深さ0.9mを測り、周溝内のトレンチ南壁付近で弥生土器が1点出土した。その土器（第3図）は、周溝底部で倒立の状態出土した。口頸部は欠損して、焼成後に底部穿孔している。外面の文様は楡描直線文・波状文であるが、回転台を用いて施文していないやや雑なものである。西溝から2個分の壺の破片が、底面あたりに集中して出土している。62J区で、方形周溝墓6基・竪穴住居跡1軒・溝2条が検出できた。平面形は4隅が途切れたものばかりであり、ほぼ同時期と考えられる。幅1.0m深さ0.6mほどであり、周溝内から土器はほとんど出土していない。62J区のSZ06は、SZ02・04と重複している。62J区の方形周溝墓群は、今回の調査で初めて検出できた墓域である。62A・B区の方形周溝墓群と62J区のそれとが一つの墓域を形成していくのか、2つの墓域を成すのか今後の課題としていきたい。SD19は、幅1.0m・深さ2mの東西にのびるV字状の溝である。SD22は、幅2m・深さ40cmの溝であり、上部はSD21などによって削平されている。SD19の埋土の中層から大量の土器が出土し廃棄されたものであろう。その2条の溝が、そのまま西方へのびて交差することが調査されている。SD19を小溝、SD22を大溝とした場合、大溝に注ぐ小溝ということが考えられる。SB04は、一辺6m・深さ20cmの竪穴住居である。埋土内から土器が少量出土している。

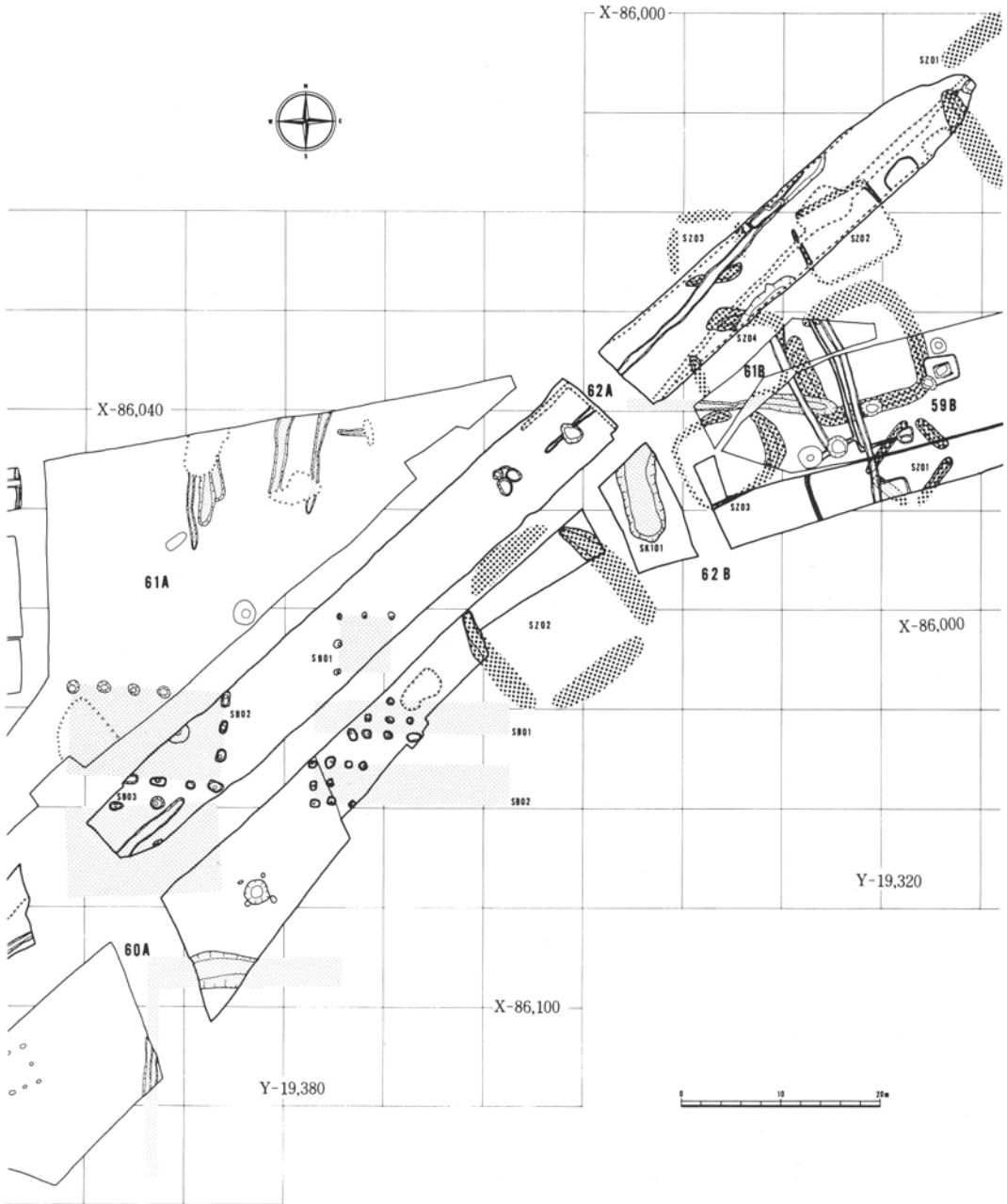
勝川Ⅱ期は、62A・C区で方形周溝墓が検出できた。平面形態は2辺以上がつながっているものである。62C区周辺にも方形周溝墓が多くあり、広範囲に墓域が拡がるのか、3群を形成していくのか、今後の課題としたい。  
(神谷友和)



B区 SZ02土器出土状況



第3図 SZ02出土土器

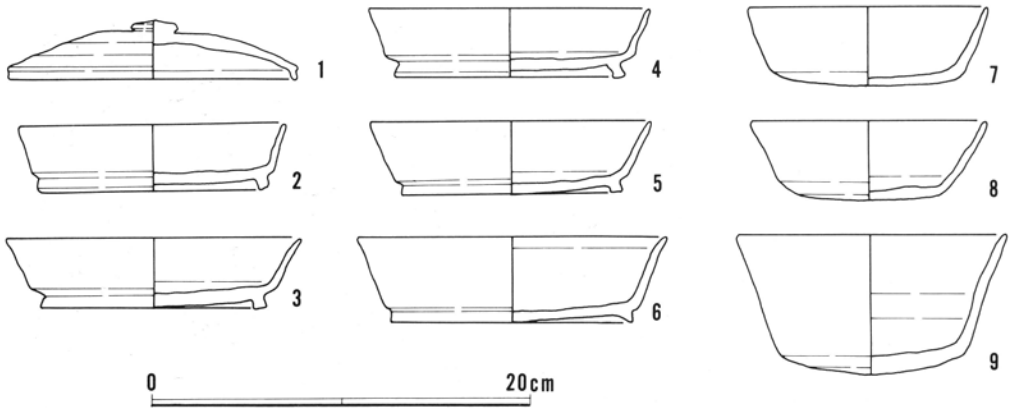


第4図 62A・B主要遺構図

奈良・平安時代

勝川廃寺を中心とする奈良・平安時代の遺構で、今回2つの重要な発見があった。1つは寺地を画する大溝について。62C区南隅において勝川廃寺南大溝が予定位置に検出できたが、さらにその内側に並行する一条の溝の存在があらたに確認できた。南大溝(62C S D02)は検出面で幅2.7m、深0.5mを測り、内側の溝(S D03)は幅約2m、深0.3m、両溝の中心部からの距離は7.5mを測る。この長さは西大溝と平行する内側の溝との距離と同一であり、したがってすくなくとも西及び南側では、7.5mの距離をたもって2条の溝が廻っていた可能性が考えられる。ところで62J区では東大溝があらたに確認できた。幅5m、深0.4~1.0m。この東大溝は従来考えられていた場所よりさらに約40mほど東方に位置しており、これにより寺地の東西の幅が確定したことになる。

次に注目すべき点は大型の建物群の検出である。62A・B区で東西5間(15m)南北3間(9m)の掘立柱建物2棟、東西2間、南北2間(5.4m)の建物1棟、さらに東西4間以上、南北2間の長大な掘立柱建物2棟が復原できる。これらの建物群の配置はおそらくほぼ平行して整然と存在していたことが予想できる。建物の性格については、この場所が勝川廃寺中心伽藍の推定地北方に位置するわけであり、この点を十分に配慮する必要がある。また62J区北隅で多量の須恵器(第5図)瓦を伴った建物跡が確認できた。これらは勝川廃寺の区域外に位置し、東方周辺部に瓦葺大型建物の存在を推測させる。



第5図 SD01出土土器

## 江戸・明治時代

下街道「勝川宿」関係の遺構としてまず興味深いものは62A区で検出できた「下街道」跡である。道の両側溝が見つかり、その溝中心間の距離は約4mを測る。北側の溝は幅1m、深0.1mであった。調査区内では下街道はほぼ現在の県道鳥居松線内に位置している。さて次に62C区北側で土坑が集中する場所が見られる。これらの土坑群は57J区で確認した井戸及び方形石組遺構・溝等に伴う施設と考えられる。これらの土坑には3つの種類が認められ、まず常滑産の埋甕を配するもの、次に粘土を坑壁面に厚く塗りかためるもの、そして大型で炭化物が多く堆積し、所によって焼壁面をもつものがある。今これらの遺構群をやや詳細に見てゆくと、まず下街道に近い所に井戸を設け、そのすぐ横に石組構造を内部にもつ大型の方形土坑が築かれ、南北と東西に溝を配する。その南に続く土坑群はほぼ3つの部分に区分できる。方形石組遺構に近接する所では埋甕土坑が整然と2列6ヶ所配置されている。その南に連続する中央部の土坑群では、埋甕が一行に3ヶ所、接して焼土、炭化物が堆積する大型土坑1ヶ所存在する。南端には粘土を塗りかためた土坑が接して3ヶ所見られ、内2基が円形、1基が方形を呈している。以上の施設は第1に井戸、溝の存在から水廻りの空間が、焼土、炭化物の堆積から火処を、甕、粘土塗から貯蔵という機能が推定でき、したがって厨房関係の場が想定されよう。ところでこうした遺構群は下街道両脇に、ある間隔をおいて見られるのであり、これらは宿場内部の状況を具体的に知る重要な手掛かりと考えられる。

(赤塚次郎)



C区 土坑群

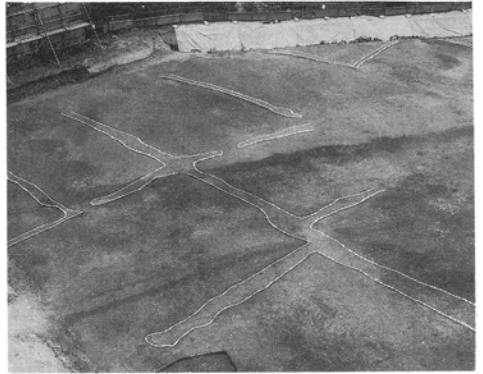


B区 遺物出土状況

苗田地区

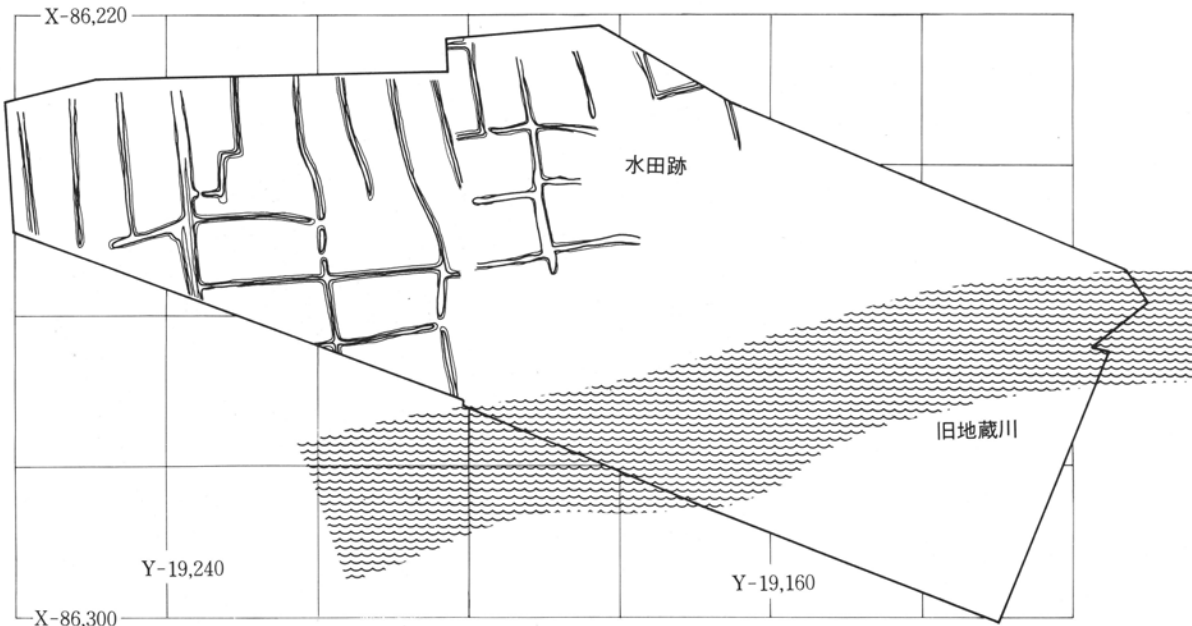
A期

昭和57年度の調査区（以下57 I 区）に東接する今回の調査区（62F区）の上面において、57 I 区同様、水田の畦畔を検出した（第6図）。畦畔は南北方向5本、東西方向4本が遺存していたが、旧地藏川（NR01）の氾濫によって削平を受けたために極めて残りが悪く、わずかに5 cm程度の高まりを残す程度であった。特に南から東側にかけては、昭和14年の地籍図にも畦畔は見られず、水田化されなかったものと思われる。



水田跡

水田の施行された時期については明確な決め手には欠けるが、水田の上面を覆う土層より出土する土器などから14世紀頃とみられる。



第6図 A期主要遺構配置図

**B期**

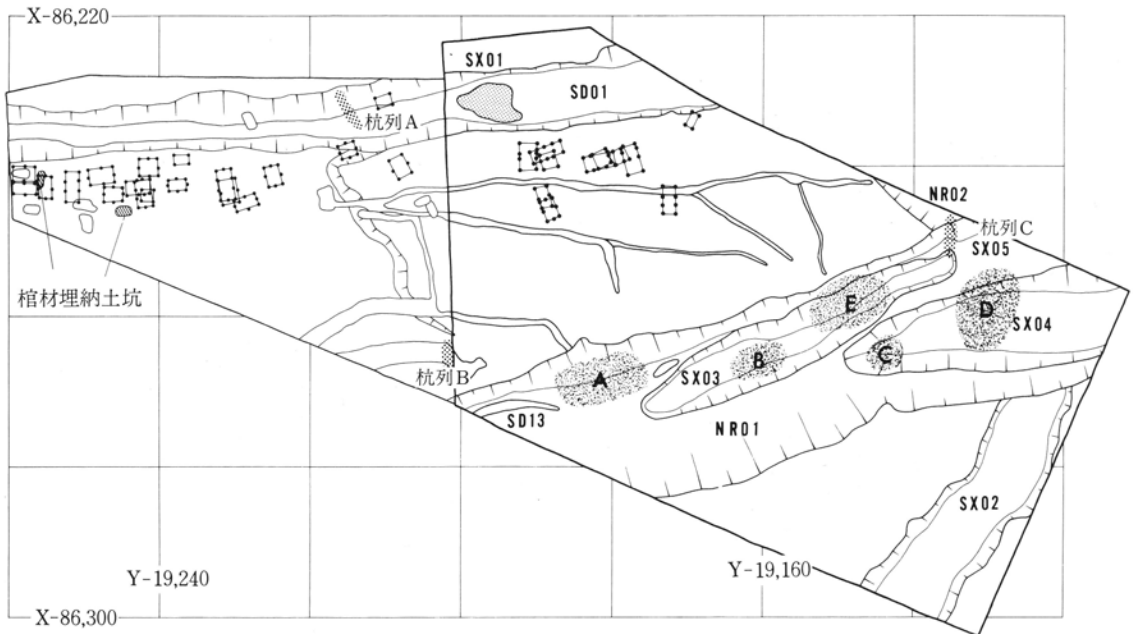
**奈良・平安・鎌倉時代**

奈良～平安時代にはNR01内に溝が穿たれ（SX04）（第7図）、その中には勝川廃寺に伴うと考えられる遺物が認められる。後に述べる須恵器・灰釉陶器・墨書土（陶）器、人形・曲物などの木製品がそれである。これらの遺物は主としてNR01からの出土である。平安から鎌倉時代の顕著な遺構は見られないが、大量の灰釉（系）陶器が出土していることから、この近辺に何らかの遺構の存在が考えられる。

**弥生後期・古墳時代**

弥生時代末から古墳時代にかけて、NR01の北肩付近に大量の木製品が投棄されていた。それらはNR01とNR02の合流部に打たれた杭列Cを境に時期がわかる。杭列Cの西側の一群をSX03、東側をSX05とする（第7図）。SX05には顕著な遺構は見られず、欠山～元屋敷期の土器と共伴して約30点の木製品が出土している。

SX03は古墳時代中期に属する。杭列Cの西側に全長約40m、幅約10mの溝が掘削されており、その中から約60点の木製品が出土した。



第7図 B期 主要遺跡構配置図（1：1000）



### 弥生時代中期

弥生時代中期末の主要遺構は、段丘直下を西へ流れる S D01 (57 I 区の S D60の東延長部分)、S D01 内に穿たれた木器未製品貯蔵土坑 S X01、S D01 と旧地蔵川に挟まれた地域に広がる掘立柱建物群で、他に土坑・溝がある (第7図)。

S D01は62 F区では約50mにわたって検出した。幅約10m・深さ約0.5mの規模を持ち、埋土は有機質を大量に含む黒色粘土で、高蔵期の洪水による砂礫層によって廃絶している。

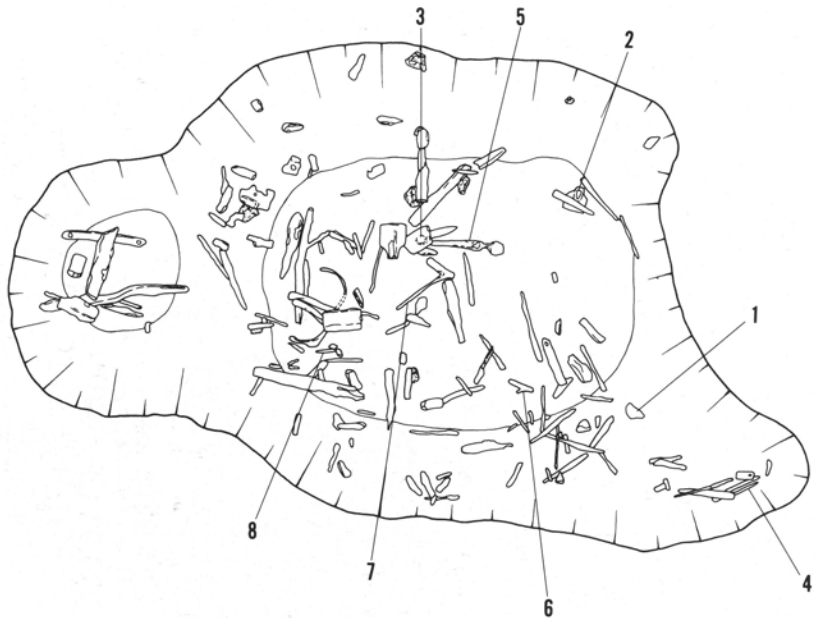
S X01は S D01内の調査区西端付近にある (第8図)。規模は東西8m・南北5m・深さは溝底より0.5mで、東西に向くややいびつな洋梨形を呈する。なかから高蔵期の土器・木製品の加工の際に出たと思われる大量の木屑に伴って33点の木製品、10数点の加工用の石器類が出土した。木製品は後述するように未製品や原材がその大半を占める。その性格につ



S X01木製品出土状況



広鋤末製品

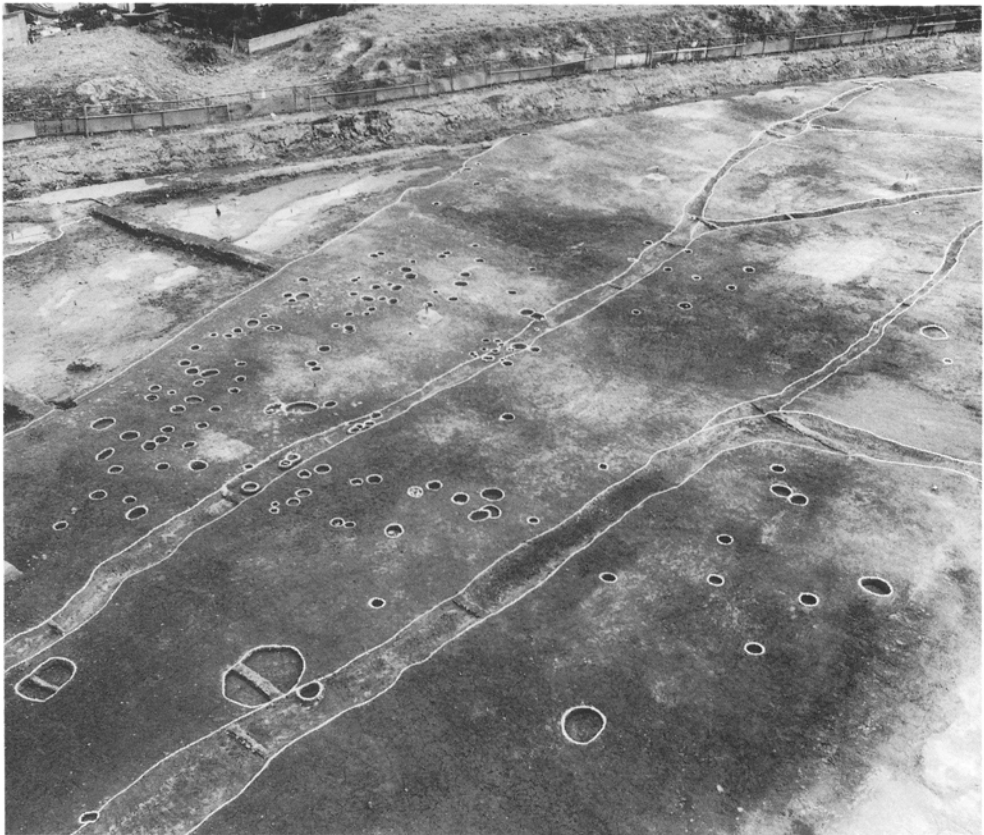


第8図 S X01木製品出土状態図 (数字は第9図の遺物番号と共通)

いては、57 I 区の杭列 A によって水流を緩やかにして S X01 に水を蓄え、木器の未製品を水漬け状態にして生木に含まれる樹脂を水に置き換える機能を有する一種の貯木場と考えるのが最も妥当であろう。

掘立柱建物は、57 I 区の19棟に加えて、今回の調査区においても11棟が重複して検出された。その他にもピットが多数見られることから、さらに多くの建物があったものと思われる。規格は1×1間-3棟、2×1間-3棟、2×2間-1棟、3×1間-4棟で、57 I 区と共通する。それぞれにほぼ同じ位置に建て替えられており、57 I 区と同様、4棟で南に開く空間を持つコの字型の配列をとるものと思われる。

これらの機能については丹羽博氏が『勝川』の報告書の中で、木製品の加工に係わる作業小屋の可能性を指摘している。その後、島根県西川津遺跡で木製品の貯蔵施設を持つ川に隣接して掘立柱建物が数棟検出されたことなど、その蓋然性はより高まったと言えよう。



調査区全景(弥生時代中期)

## S X 01

S X 01からは、前述のように高蔵期の木製品が33点出土した。完成品はわずかに6点に過ぎず、他はすべて未製品である。広楯7点、狭楯1、又楯（鋤）1点、鋤4点、縦斧の柄1点、手斧の柄3点（完成品1点を含む）、タモ網の枠、杓子、弓各1点、その他原材が見られるなど、農工具がその大半を占める。うち9点について記述する。

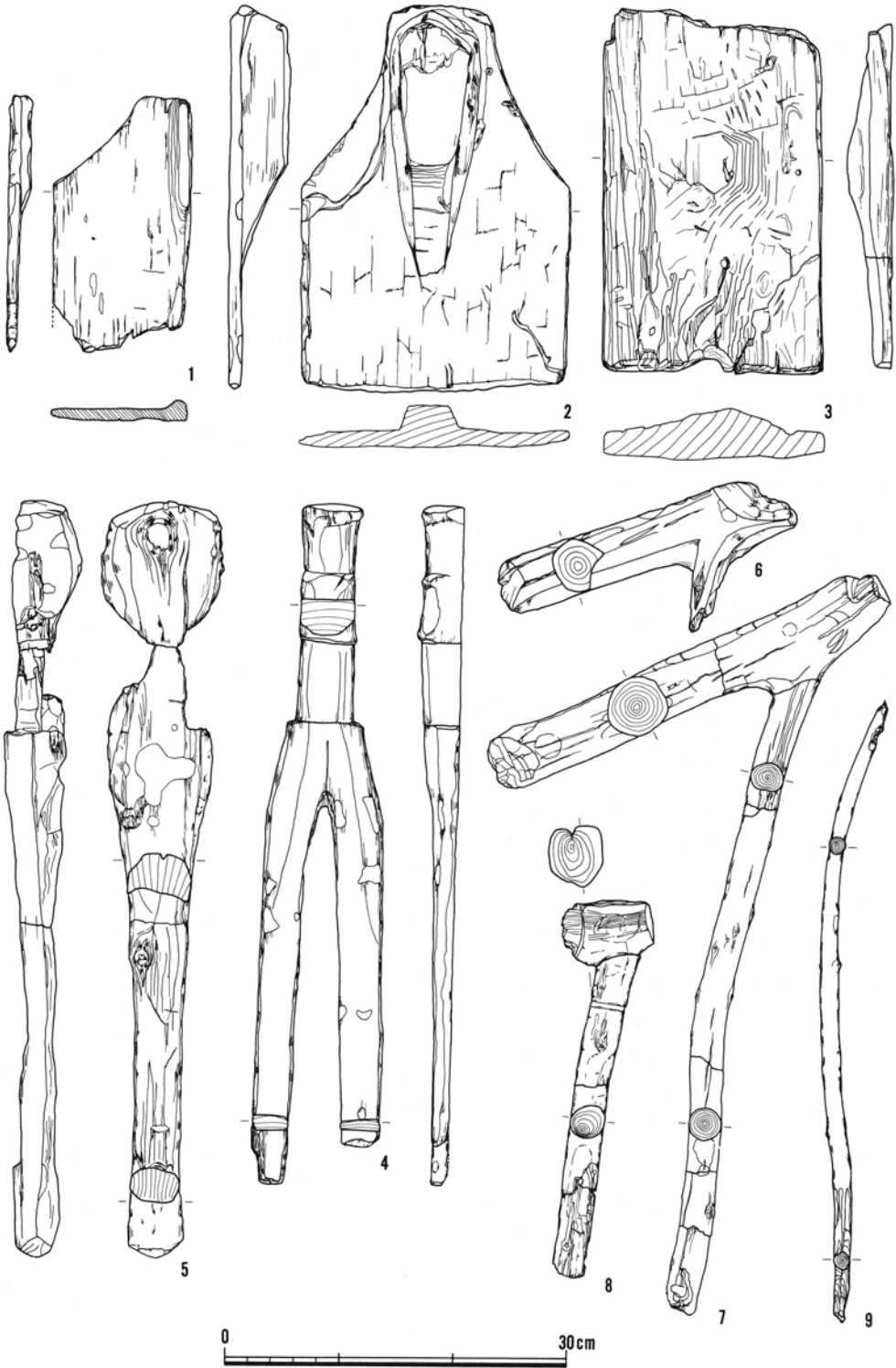
広楯は形態の異なる2種類がある（第9図1・2・3）。1・2は上端が狭く、下端が広がる形態を持つ。1は長さ22.5cm以上、幅12.2cm以上、厚さ1.0cmで、長さ13.2cm、幅2cm以上、厚さ1.1cmの舟形突起を持つ。2はそれよりさらにひとまわり大きく長さ34.1cm、幅23.8cm・厚さ1.2cmで、長さ22.3cm、幅8.1cm、厚さ4.2cmの舟形突起がつく。舟形突起はいずれも穿孔前で、刃先もまだ作り出していないが、そのほかの点では両者共ほぼ完成状態である。3は長さ30.3cm以上、幅19.4cm、厚さ1.8cmの長方形で、着柄部は中央に若干の盛り上がりを持つが、穿孔はされていず、刃部も作られていない。

又楯（鋤）（4）は全長60.7cm、最大幅が11.0cmで、厚さは刃部で1.7cm、握部で3.7cmと、他の遺跡の出土例と比べてかなり大型でしかも極めて厚い。刃部および握部の断面はコマボコ型で、裏は全体に平坦に仕上げる。ほぼ完成品と言ってよいが使用された形跡はなく、さらに薄く仕上げる途中であったのか、あるいはまだ充分乾燥し切っていなかったために水漬けしてあったのか、いずれにせよここでは未製品として扱っておく。なお、弥生時代中期の出土例として東日本では最古段階に属する。

縦斧の柄（5）全長66.5cm、最大幅8.9cm、厚さ3.6cmで、先端に巨大な節が残る。握部は完成しており、節を切り落とし、穿孔して縦斧の柄とするのであろう。

手斧の柄（6・7・8）のうち（6・7）は未製品で、（8）は完成品（破損品）である。当遺跡出土の手斧の柄の未製品に見られる特徴は、柄の部分に対して着刃部が極めて長い点である。これはS X 01のものに限らず、S X 05の出土例も同様である。（8）は恐らくS X 01内の未製品を加工するために用いられたのが、破損したために廃棄されたものと思われる。着刃部は柱状片刃石斧を着装するために、ソケット状に作られている。

弓（9）は現在の長さは55.4cmであるが、弭部が一方にしか見られず、他方は先端が削られているために、本来はこの2倍程度の長さであったものが折れたために、再度削り直して別の用途に使うつもりだったのであろう。（樋上 昇）



第9図 SX01出土木製品

## NR01

## 古墳時代

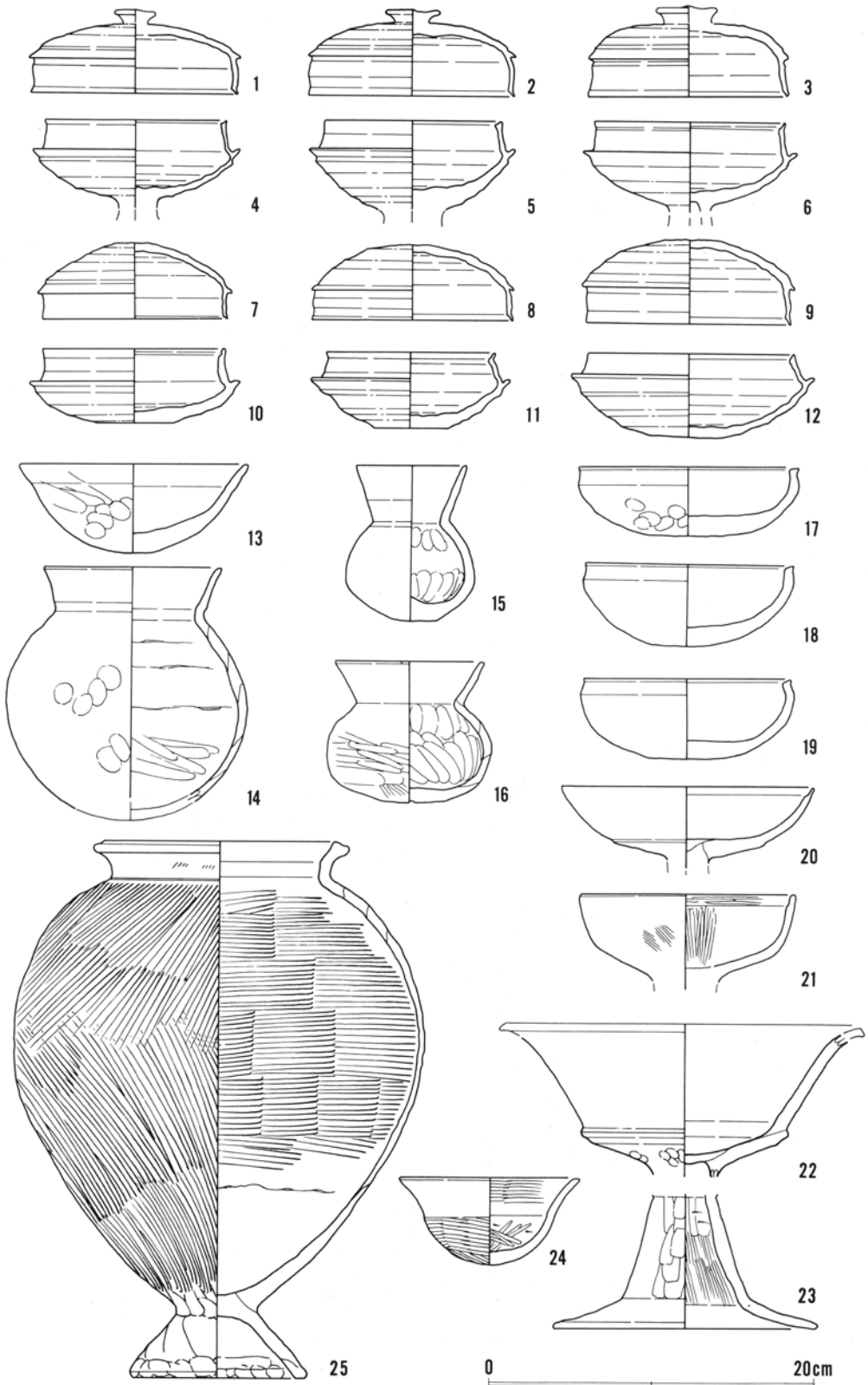
NR01E地点（第7図）より多量の須恵器、土師器及び木製品の出土が見られた。

木製品は種類として梯子、建築部材、鋏、手斧、錘があり、その他楯、削物等が見られる。E地点を中心にかなり高密度で検出しえたが、使用状況等を推測させるような特徴的な出土状況を見せていない。須恵器は第10図のように蓋杯、有蓋高杯が中心である。その特徴は杯蓋では天井部が高く、回転ヘラケズリは上位に偏る傾向がみとめられる。杯身は底部に平坦部をもち、口縁端部には段が見られる。有蓋高杯は杯部が深く図示していないが、透孔を穿がない短い脚が存在する。なお口縁部と体部を区切る稜は上方へ強く突出し、その下位には明瞭な段を構成する。胎土を含め以上の特色は尾張産の須恵器に通有に見られるもので、凡そTK47～MT15型式に含まれるものと考えられる。土師器は、小型丸底壺、鉢、小型の甕、台付甕、高杯等が見られる。高杯は20、21の彎曲する杯部をもつものと、22のように大型で外反する杯部を有するものと2種類ある。25の台付甕は「宇田型甕」である。E地点より出土した遺物はほぼ5世紀後半から6世紀前半にいたる時期のものを含むと思われるが第10図1～12、17～20はSX03中央（E地点西側）北掘形より集中して出土しており、何らかの一括投棄が推定できる。

（赤塚次郎）



木製品出土状況(SX03 E地点)



第10図 E地点出土土器

## 奈良～平安時代

NR01からは百個体を超える、奈良～平安時代の須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器が出土した。8世紀前半のものも若干見られるが(第11図1・2)その主体は折戸10号窯式期から東山72号窯式期(虎溪山1号窯)であり、それらの時期の中には約50点に及ぶ大量の墨書土(陶)器が含まれる。また、それぞれの分布にいくつかの集中地点が見られることから(第7図A～D地点)、数回にわたる一括投棄によって形成されたものと思われる。

まず、折戸10号窯式期(以下、O-10期、第11図3・4・12～14・20～22、第13図1～3)は点数が少なく、A～Dの各地点にその分布が見られるが、C・D地点にやや集中する傾向がある(20～22)。墨書内容は、A地点からは「×」(3)、B地点「足」(1)C地点「升」、D地点「巫」(2)である。C・D地点には人形2点(3)、舟形、斎串、曲物が伴う。また、(12)の杯蓋には、一部口縁を打ち欠いて、灯火器として用いた例が見られる。

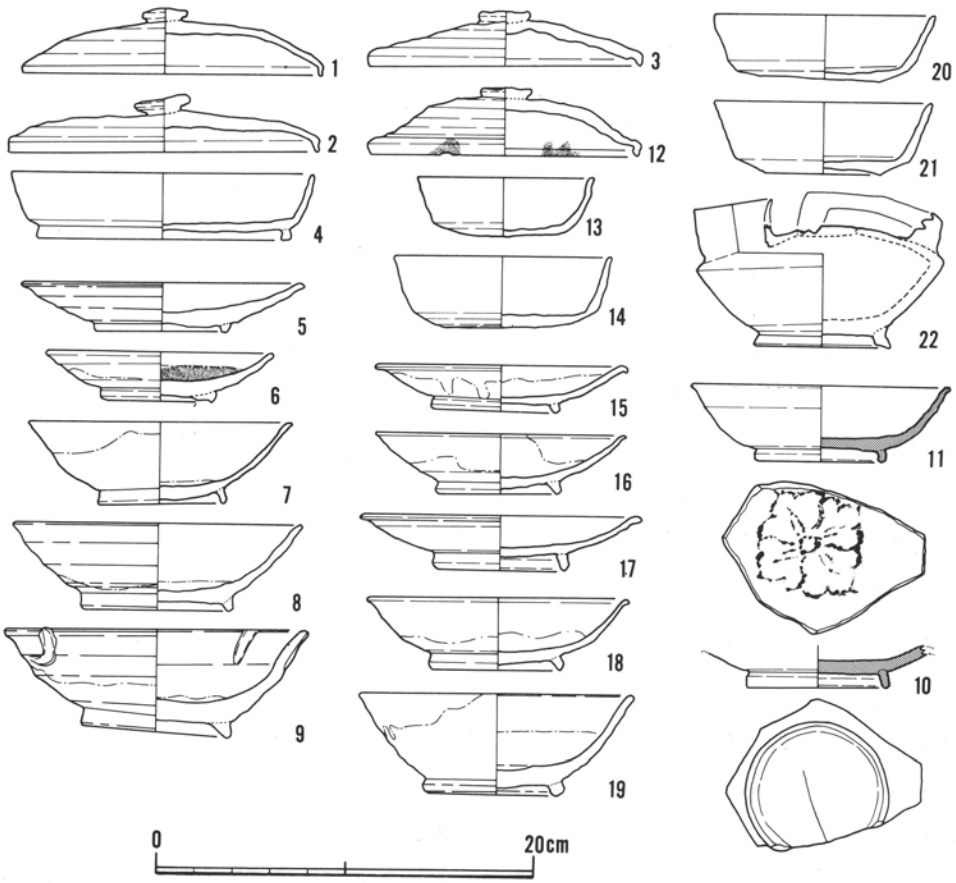
黒笹90号窯式期(K-90期)には点数が増加する傾向を見せ、特にA・B地点に集中して出土するようになる(第11図15～18、第13図9～11・16～18)。A地点には、「口林」(9)、「寺」(10)、「宅北(周囲5か所に花卉)」(11)、「井手」等の墨書陶器がある。B地点からは「口行」(16)、「別」(17)「井上」(18)等の墨書をもつ陶器が、人形4点(1・2)、曲物7点、木簡1点と共に出土している。

東山72号窯式期(H-72期)には東濃産の虎溪山1号窯の灰釉陶器が主体を占めるようになる。この時期、灰釉陶器の出土量が爆発的に増え、特に墨書を持つものの割合が急増する(第11図6～8・19、第13図4～8・12・14)。「万」(4)、「東北」(5)、「合(人万)」(6)、「口上」(7)、「南生」(8)、「太」(12)、「元」(14)等、当遺跡出土の墨書陶器の大半はこの時期に属し、出土地点はA地点1か所にはほぼ集中する。共伴遺物は曲物が1点見られるのみで、ほぼ純粋に土器だけが集中して出土している。また、灯火器や転用硯(第11図6、第13図14)として使われたものも見られる。

以上、3時期の主として墨書土(陶)器の出土状況について見てきた。次に、各集中地点単位でその墨書内容について検討してみよう。

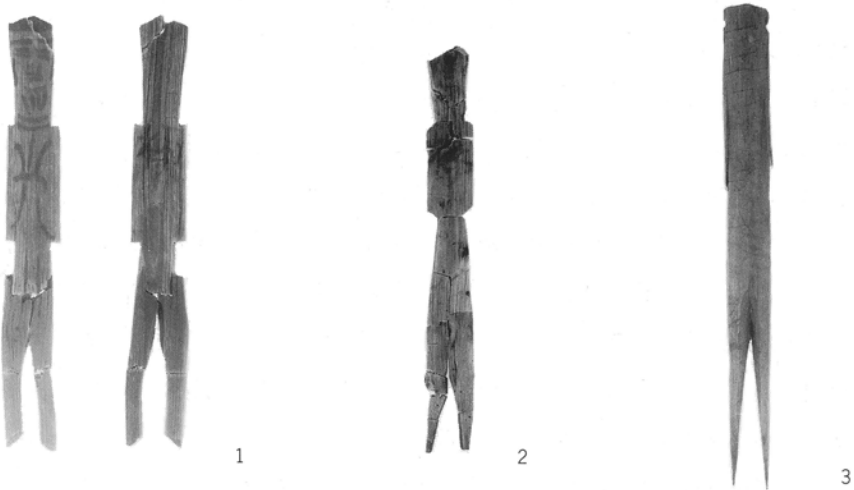
まず、O-10期には、人名(1)、記号(3)などが見られるが、特に目を引くのは「巫」(2)である。「巫女」・「巫覡」等の用例に見るごとく、呪術的な意味合いを持つものと考えてよからう。人物、舟形・斎串といった祭祀具と共伴する点も、その傍証とならう。

K-90期A地点の墨書は、「寺」(10)、「宅北」(11)、「井手」等、地名を表すと考えられる内容が見られる。「寺」・「宅北」は勝川廃寺との関連を想像させ、勝川廃寺自体の存続期間が従来よりさらに下ることを示唆する。「井手」は地蔵川からの分水施設の存在を思わせる。B地点は4点の人形・7点もの曲物が共に出土している点からも、O-10期のC・D地点同様、



第11図 NR01出土陶器

1~11 : A地点 12~19 : B地点 20~22 : D地点 (10・11 緑釉陶器)



人形 (1・2 : B地点、3 : C地点)

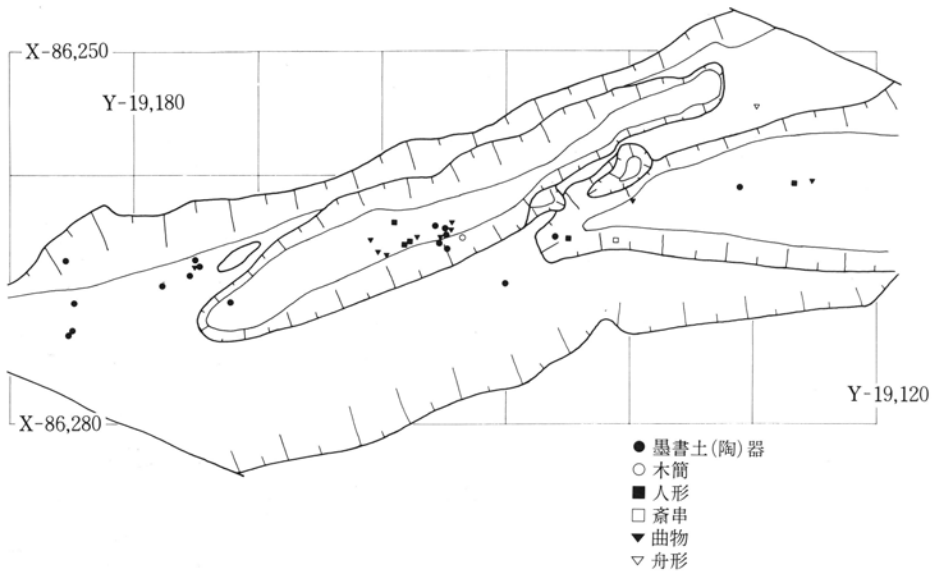


祭祀との関連が想定できる。人形4点中、(1)・(2)は同位置から出土した同型同大のものである。しかも1体は胸部に、もう1体は背部に1字ずつ文字を描いており、さらに樹種を異にしている点で興味深い。曲物も何らかの祭祀的用途に使われたのであろう。墨書内容に「口行」(16)、「井上」(18)等、人名と思われるものが見られることは興味を引く。

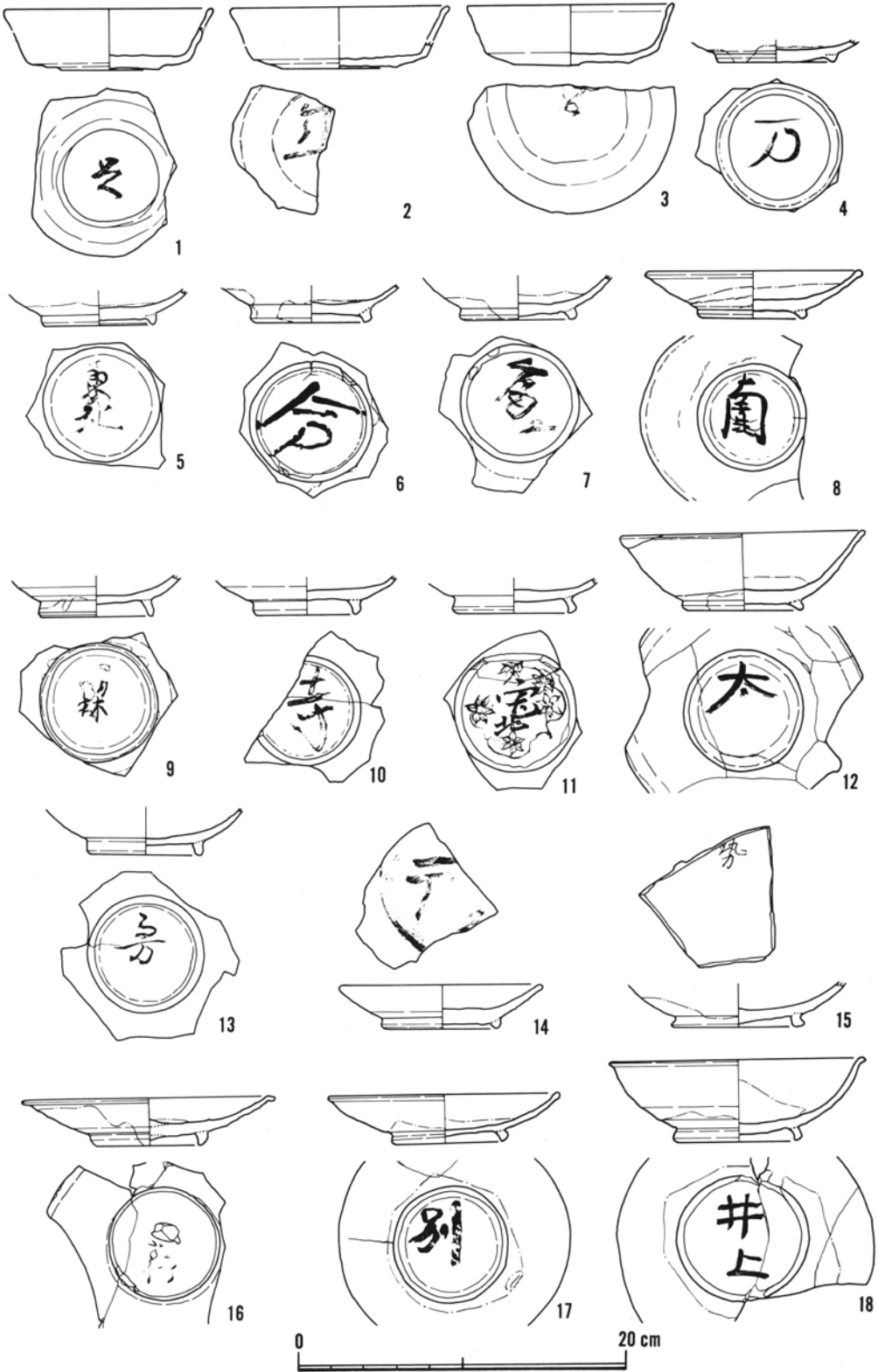
H-72期は、1か所に大量の墨書陶器、灰釉陶器のみが、投棄されている。その墨書内容は「南生」(8)、「太」(12)等の吉祥句、「万」(4)、「人万」(6)等の人名、その他いくつかのパターンが見られる。これら一群も、その出土状況等から見て、前二時期同様祭祀的性格を考えたい。

では、この地で行われた祭祀とはどのようなものであろうか。祭祀具の構成、祭祀行為の場が川であることなどから、祓が最も近いものと思われる。さらに言えば、人名・吉祥句を描いた墨書土(陶)器は自らのケガレ・災いを託し、流す、一種の墨書人面土器的要素を持ったものと考えたい。O-10期の人形・舟形・斎串・墨書土器から、K-90期の人形・曲物・墨書陶器、H-72期の墨書陶器への祭祀具の構成の変遷は、まさに律令的祭祀から中世的祭祀への変遷の跡を辿っているようで極めて興味深いものと言えよう。

(樋上 昇)



第12図 NR01遺物出土位置図



第13図 墨書陶器

1 : C地点 2 : D地点 3~12・14・15 : A地点 13・16~18 : B地点 (15は刻書)

## まとめ

今年度の調査成果を時代をおって整理しておく。

人々の徘徊 勝川の地に人々の足跡が認められるようになるのは、従来弥生時代中期であると考えられていたのであるが、62F区最下層、町田、松河戸遺跡からの縄文土器の出土により、縄文時代中期まで一気に遡る可能性がでてきた。縄文時代中～後期に庄内川中流域を中心としたかなり広い範囲の領域を徘徊する人々が想定できる。

勝川への定着 弥生時代中期から古墳時代前期まで勝川遺跡に集落が営まれる。この時期に関して次の2点が明らかとなった。第1に木製品製作場の設定、方形周溝墓の変革、大溝の消失、これらは高蔵期内の出来事であり、一つの画期がそこに存在する。第2に弥生時代末期になると町田遺跡の微高地上に集落が形成される。勝川集落の拡散が弥生時代末期に開始される。集落構造として弥生時代中期末と末期の2つの画期の存在が明確となった。

前方後円墳の時代 5世紀末～6世紀にかけて大型の古墳が築造され、それまでの勝川集落は大きく解体する。62F区N R01での須恵器・土師器・木製品の多量の出土はこれら大型古墳の造営時期と一致する。特にその位置は前方後円墳勝川大塚古墳のくびれ部北方にあたりその関係が注目されよう。また町田、松河戸遺跡でも5世紀後半～6世紀前半にかけて遺物の広がりや遺構の存在が認められ、当地域の開発が活発化することが窺われる。

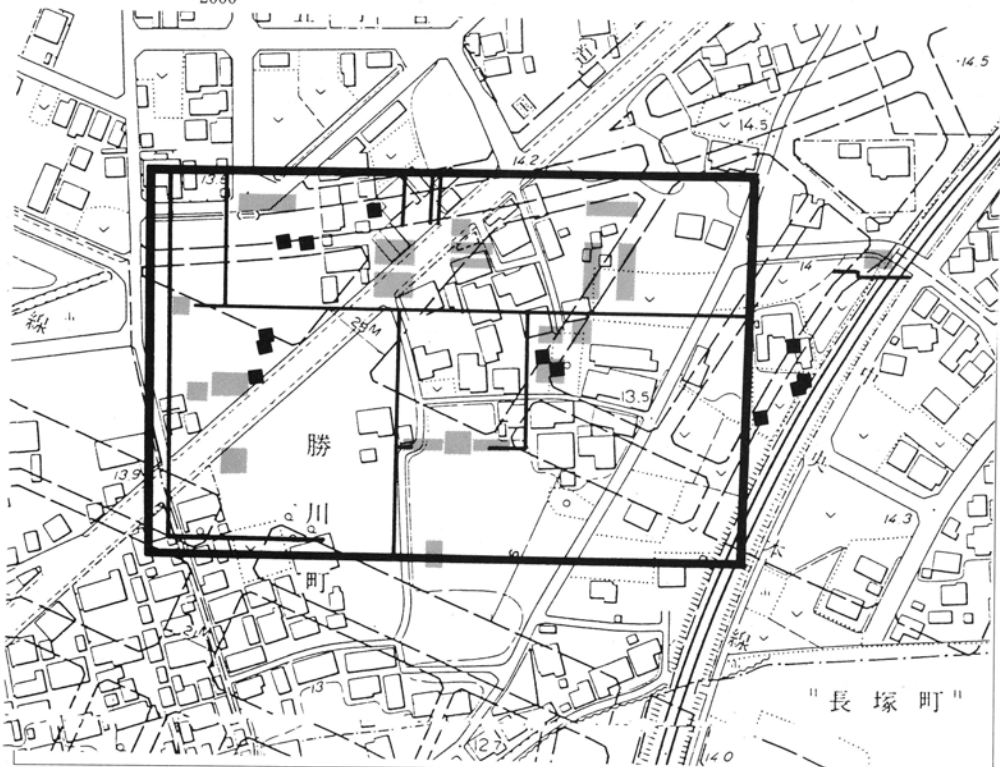
勝川廃寺と役所 700年前後勝川廃寺の建立があった。今回勝川廃寺の寺地が確定し（東西227m南北148m）その内部で大型の建物群が発見できた。また寺地以外でも奈良・平安時代の遺構、遺物の出土が目立つ。特に62F区N R01での緑釉、灰釉陶器、墨書陶器、木製品（人形・木筒）の出土が注目されるのであり、文字を恒常的に使用する人々の存在は、地方行政単位の中心を類推させる。

計画的な水田開発 勝川・町田・松河戸遺跡で水田跡の発見があいついでいる。その嚆矢は現状では12世紀を大きく遡るものはない。12世紀後半、庄内川中流域に存在した安食庄との関係が興味深い。水田の開発は時に計画性（地割等において）を見せながらも地形の微妙な凹凸で場所によって水田形成は大きく時代が前後することが判明した。また遺物の検討から14～15世紀（南北朝以降）を中心として本格的な水田開発が認められることが推察できる。

勝川村と勝川宿 勝川村としての集落構成の成立が14世紀以降であり、その村落形態が江戸時代の勝川宿へ連続するとすれば、その過程は現在の「勝川」に直接結びつく重要な歴史と考えてよい。勝川宿の在り方は未だその一担を調査により明らかにしたにすぎない。「勝川村」中心部での調査研究が注目される所である。行政的な配慮を期待したい。

(赤塚次郎)

		勝川の歴史		
縄文		人々の徘徊	松河戸遺跡の縄文集落	
弥生	300			
	0		勝川遺跡の集落	
古墳	300	勝川への定着	木製品製作場 町田遺跡の集落	邪馬台国
		前方後円墳の時代	勝川大塚古墳・洲原山古墳	ワカタケル大王
奈良				藤原京
平安	800	勝川廃寺と役所	勝川廃寺の建立 墨書・人形 安食庄	平城京 平安京
鎌倉	1200			源頼朝
		計画的な水田開発	水田開発の活性化	後醍醐天皇
室町	1400			
				織田信長 関ヶ原の戦
江戸	1600	勝川村と勝川宿	勝川宿	ペリー来航
明治	1800			
大正	1900			第1次世界大戦
昭和	2000		発掘調査開始	



第14図 勝川廃寺建物配置図(■堅穴住居跡・アミフセは建物跡)